

## 富山県立公文書館所蔵の往来物資料について

### Investigation report on "OURAIMONO" documents of Toyama Prefectural Archives possession

郡 千寿子\*

Chizuko KOHRI\*

#### 要 旨

富山県立公文書館所蔵の資料を調査し、そのなかから「往来物」に分類できる資料について検討考察した。その結果、「高堂家文書」に4本、「小山家文書」に2本、計6本の近世期版本の往来物資料が所蔵されていることが判明した。『往来物解題辞典』においても、所蔵先として「富山県立公文書館」の記載は見られず、従来、調査研究されていないことが知られ、本稿において初めて書誌と資料性について報告するものである。該当資料は、それぞれ「高堂家」「小山家」で所蔵されていたことが判明しており、実際に使用された家庭や背景が明らかであるという点において貴重である。消息科往来が『庭訓往来抄』の1本、教訓科往来が『新板実語教童子教』と『六論衍義大意抄』の2本、産業科往来が『商売往来』の1本、歴史科往来が『腰越状』の1本、女子用往来が『百人一首・女今川・女消息往来』の1本という結果であった。出版地域別にみると、不明なものが3本あったが、京都「要法寺前町」「浪速」「尾州名古屋」といった多彩な出版地域名が記載された資料がそれぞれ確認できた。特に『庭訓往来抄』は、諸本のなかでも重要な位置づけにある資料性をもつことを明らかにした。

東北地域の調査結果との比較検討を含めて、各地域の教育環境や文化的背景についての研究をすすめる上で、今後の基礎となる調査報告である。

キーワード：往来物、出版文化、庶民教育、言語生活、富山

#### 1. 研究の背景について

近世期以降に出版された往来物資料を通して、実生活にどのようにそれらの文献資料が関わっていたのかの具体像を探ることを目的に研究<sup>1)</sup>をすすめている。往来物は、寺子屋などで手習いのために使用された教科書の類の総称であるが、近世期には様々な種類のものが出版されている。従来の往来物研究は、教育史資料という側面が大きかったが、人間文化形成に果たした役割や社会に与えた影響など、多くの未開拓課題が残されており、新たな視点からの活用が期待されている。

日本社会の近代化に往来物資料が、大きく関わっていたことが予想されるのであるが、文献資料の基礎的研究をはじめとして、その発掘も未だ十分にはすすんでいない現状にある。そうした背景をふまえて、東北

地域の往来物資料について調査をすすめ、目的別や出版地域別に整理し、その偏在状況などについて分析研究<sup>2)</sup>した。注目すべき研究成果としては、弘前・山形といった内陸地域では江戸文化圏からの影響が大きく、秋田・酒田といった日本海沿岸地域では京都大阪といった関西文化圏からの影響が大きいことを明らかにしたことである。地域による文化的土壌の相違を指摘し、陸路だけでなく海路による文化流入や混交、東北と関西の影響関係について確証を得たのであった。

拙稿「往来物にみる教育観—近世庶民生活におけることばの修得—」<sup>3)</sup>では、地域の経済的な発展、社会的な成熟、教育や文化水準向上の背景に往来物が影響を及ぼしたことや語彙変遷について考察検討した。これらの研究成果をふまえて、北前船を利用した西廻り航路の重要性を考慮し、寄港地の北陸日本海域へ視野を広げ、地域間格差や言語文化伝播過程の解明へとさら

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

なる研究の進展を目指したいと考えている。

本稿は、東北地域と海域でつながり、近世期に文化交流など関係が深かったと予測される、北陸地域に調査対象を拡げたものであり、手始めとして、富山県立公文書館の往来物についての調査結果を報告する。富山は日本海域で東北文化圏と関西文化圏をつなぐ役割を担っていた。東北の日本海沿岸地域である秋田や山形の酒田では、関西文化圏で作成された往来物資料が多く所蔵されていた。一方で内陸部の弘前や山形所在資料は、江戸の出版物が多数であった。北陸においては、こういった所蔵状況にあるのだろうか。往来物資料という限定的な視点からであるが、今後、この調査結果を発端として、北陸文化圏における教育背景や文化的土壌などへと研究を発展させていきたいと思っている。

## 2. 富山県立公文書館と高堂家文書について

すでにすすめてきた東北地域における所蔵往来物の調査にならい、原則として、写本は除き、版本に限って成立時期や出版元を確認した。調査対象の資料それぞれについて、目的別と出版地別に分類整理<sup>4)</sup>して、地域ごとの特徴について今後考察検討したいと思う。写本を除いたのには意味がある。本研究の大きな目的のひとつは、地方における近世期の庶民生活について、出版文化<sup>5)</sup>を通して考えてみることである。写本は、その資料の内容を知るには重要な資料であるが、どこでどのような文献が出版され、それがどのような場所で使われてきたか、文化や教育の流通状況<sup>6)</sup>を解明するためには、版本の方がより大きな資料的価値をもつと考えたからである。すべてを詳細に検討するよりも、大要を明らかにするために調査資料をより限定して考察検討する方法をとった。

基本的には、従来の調査手法を踏襲し、富山県立公文書館所蔵の往来物資料を調査することにし、分類整理を試みた。富山県立公文書館には多くの公文書が所蔵されている。地方自治法施行前の公文書はもちろん、「浅野家文書」「石川家文書」「伊藤家文書」「海内家文書」「高堂家文書」「高浪家文書」「三辺家文書」といった寄贈資料、「大田家文書」「岡崎家文書」「高安家文書」「中島家文書」「羽馬家文書」「森田家文書」といった委託資料などを所蔵している。目録を参考として検討調査したところ、「高堂家文書」「小山家文書」に往来物資料が所蔵されていたことが判明した。それらについて本稿では書誌情報と合わせて、一部画

像を提示して紹介することにする。

高堂家<sup>7)</sup>は、富山藩の十村を務めた家柄であり、公文書館には、平成12年に近世・近代資料461点が、平成20年に近代資料36点が寄贈されたという。十村とは、他藩の大庄屋に相当する加賀藩・富山藩特有の職名で、慶長9（1604）年に創始されたといわれ、十村の任務は、農民を支配し、巡視して、高方・収納方など一切の農事を監督する、農民の最高職である。無組御扶持人十村・組御扶持人十村・平十村の三種があり、それぞれに列と並があり、計9つの階層があった。

当高堂家では、平右衛門美雅が宝暦9（1759）年に初めて十村に任命され、次代平右衛門照雅は御扶持人十村、次代平右衛門喜雅は十村、などと十八世紀から幕末まで代々が御扶持人十村、あるいは十村に任命されていた。このような過程で、近世資料は十村としての職分に関わる記録内容の留張類が多くを占めているようである。目録を参考にしながら調査した結果、こうした資料群のなかに『庭訓往来抄』『新板実語教童子教』『商売往来』『六論衍義大意抄』といった往来物に該当する資料4本を確認した。

『庭訓往来抄』は、往来物資料の中でも代表的なものである『庭訓往来』の注釈を施したものである。『庭訓往来』は、中世から明治初年に至るまで最も普及した往来物の一つで、古往来の一種である。目的別分類としては「消息科」である。一か月往返二通ずつ、一年二十四通、これに単簡一通（七月状または八



【画像1】

書名：庭訓往来抄（巻中）  
 目的別分類：教訓科  
 表紙：茶色、題箋あり  
 形状：横18.0cm 縦27.4cm  
 総丁数：58丁  
 出版地域：京都（要法寺前町）

月状)を加えた計二十五通の手紙文より構成される内容は、武家および上層・庶民の社会生活を中核として、新年の会、詩歌の会、地方大名の館造り、領国の繁栄、大名・高家の饗応、司法制度、病気の治療法、地方行政の制度等を主題とする手紙で、類別単語集団(衣食住370語、職分職業217語、仏教179語、武具75語、教養46語、文学16語、雑61語、計967語)を収めている。

この中世期に作成された『庭訓往来』は、社会情勢や時代背景を異にする近世を経て、明治の近代に至るまで、かなり長い期間にわたって活用されてきた。川瀬一馬氏<sup>8)</sup>によれば、『庭訓往来』隆盛の要因として、仮名による注釈書の『庭訓往来抄』が多数作成されてきたことと関係すると推測されている。注釈だけでなく、本文の内容に即した絵図が掲載された『絵入庭訓往来』なども存在し、『庭訓往来』に関係したこうした往来物が何種も作られてきたことは、筆者も東北における往来物所在調査で確認してきている。

本稿で紹介する『庭訓往来抄』【画像1】は、題箋による書名では「庭訓往来鈔」と「鈔」の漢字が記されているが、内題としては一丁表に「庭訓往来抄 卷中」とある。題箋が作成当時のもので後付けされたものでないとの保証がないため、内題の方の「庭訓往来抄」を採用しておく。表紙は茶色で、大きさは横18.0cm、縦27.4cm。総丁数は58丁である。最終丁裏【画像2】に「要法寺前町」とあり、また綴じしろ部分に「堤六左衛門開板」という刊記を確認することができる。京都の要法寺は日蓮宗本山であり、近世初期に古活字版で古典作品を次々出版し、寺院による活字開版として知られている。その門前に出版書肆が栄えるなど、京都は当時の出版先進地であった。

また本資料は、巻頭に「卷中」とあることから、本



【画像2】

来は上中下の三巻本であった可能性が高い。『国書総目録』<sup>9)</sup>によれば、『庭訓往来抄』としては「二巻一冊」のものと「三巻三冊」のものが記載されている。刊行年の違う「嘉永一六版」「寛永年間版」「万治二版」「寛文八版」「嘉永四版」など様々な種類が刊行されていたことが知られる。「三巻三冊」のものとしては、刊行年不明の資料で「東北大(狩野)」「慶応(幸田)」に所蔵されているとの記載がみえる。一方「鈔」の漢字表記『庭訓往来鈔』は、別名「左實註庭訓」とあり、成立は「享祿・天文頃」で「国会図書館」に写本が所蔵されているが、一冊本で、本稿紹介資料とは別種である。

他方、『往来物解題辞典 解題編』<sup>10)</sup>には、「大本三巻三冊」の「庭訓往来抄」が記載されており、所蔵先に「石川県立歴史博物館」とあった。北陸地域に所蔵されているという点からも、当該資料との関係性を今後検討する必要があると思われる。

ところで、『庭訓往来』の注釈書については、川瀬一馬氏が「庭訓往来の假名抄について一古往来の研究(その三)一」<sup>8)</sup>で詳細に諸本の検討をなされている。そのなかに平仮名本「要法寺前堤六左衛門刊本」が紹介されている。「平仮名交りの版本としては最初の開版と認められる。書風すべて版式上寛永後半期のものと思われる。」とされ、「他に伝本を見ない。三浦博士旧蔵。」とある。真名書きやカタカナ書きの注釈書も存在するが、平仮名で記された最初の注釈書が「要法寺前堤六左衛門刊本」であり、「三浦博士旧蔵」以外



【画像3】

書名：新板実語教童子教  
 目的別分類：教訓科  
 表紙：薄青、題箋あり  
 形状：横14.4cm 横21.0cm  
 総丁数：14丁  
 出版地域：大坂(浪速書林)

には未見の資料であるとされているのであった。

富山公文書館所蔵の『庭訓往来抄』の刊記部分を「三浦博士旧蔵」資料と比較したところ、同種のものとして判断できる。つまり『庭訓往来』の注釈書として、重要な位置づけにある、しかも「他に伝本をみない」資料のひとつが、富山に所在していることが明らかとなったといえるであろう。高堂家では、定番の往来物『庭訓往来』の注釈書のなかでも、平仮名交りの版本としては最初の、京都「要法寺前堤六左衛門」刊行の貴重な往来物資料を保有していたということを知り得たのであった。

次の資料は、『新板実語教童子教』である。目的別分類では「教訓科」である。表紙は、薄い青色のもので題箋が残存している。題箋に外題として『新板実語教童子教 全』【画像3】とみえる。大きさは横14.4 cm、横21.0 cmであり、総丁数は14丁である。最終丁の最後【画像4】に「浪速書林」とあり、大坂で出版されたものであることが知られる。

『新板実語教童子教』は、『国書総目録』には記載がみられないが、『古典籍総合目録』<sup>11)</sup>に「実語教童子教」として「新板」も含めて記載がみえる。刊行年や書名も多種多様の同類資料が存在していることが知られる。平安末期に『実語教』が、鎌倉前期に『童子教』が作成され、それが合綴されて普及し、『実語教童子教』として版を重ねていった。

内容は、『実語教』が主に「智」を礼讃し学問のあらましを初学者に諭す勸学教訓であるのに対して、『童子教』はこの世の因果の道理や儒仏の教えを論じた幼童訓・処世訓となっている点で異なっている。それぞれ暗誦に便利だったため、寺子屋教育でも広く教授されたものであり、江戸前期を代表する往来物資料といえる。



【画像4】

三本めは、『商売往来』【画像5】【画像6】である。目的別分類では「産業科」であり、表紙は薄い緑青色で、題箋はない。大きさは横15.2 cm、縦22.0 cmの総丁数13丁のものである。出版地域も不明であるが、『商売往来』<sup>12)</sup>も、前述した『庭訓往来抄』や『実語教童子教』と同様に往来物資料としては、かなり普及した代表的なものである。大本の一冊本で、商業活動に必要な語彙を列挙しているが、結果として生活関係語彙集としての役割を有していたと考えられる。『商売往来』の最後の結びの文章にいくつかの種類があることが知られているが、この資料では「倍々利潤無疑。仍如件」で結ばれ、勤勉・正直・節儉の諸徳に重点をおいて論しており、商人だけでなく、万人に通じる教訓書となっている。江戸後期より明治前期にかけて数百の版を重ねた資料であり、最も流布した往来物のひとつであるが、こうした代表的な『商売往来』といった往来物が実際に高堂家で使われていたらしいことが確認できたといえよう。

次に『六論衍義大意抄』【画像7】を紹介する。目的別分類では「教訓科」になる。24丁裏【画像8】に「安政二年 乙卯五月」「書肆 尾州名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎善教謹誌」と記載がみえる。表紙は薄い灰色で、題箋はなし。大きさは横15.6 cm、縦22.8 cmで総丁数は24丁である。『国書総目録』<sup>13)</sup>によれば、「天保五版」が「東北大(狩野)」「日比谷(諸家)」に所蔵があり、「安政二版」は「日比谷(諸家)(栗田)」に所蔵があるという。『往来物解題辞典 解題編』<sup>10)</sup>

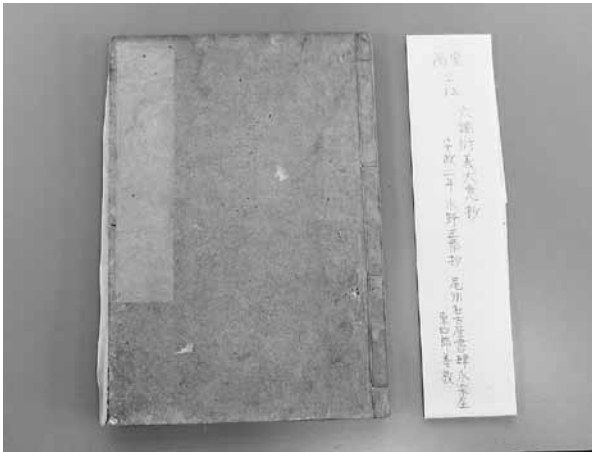


【画像5】

書名：商売往来  
目的別分類：産業科  
表紙：薄緑青、題箋なし  
形状：横15.2 cm 縦22.0 cm  
総丁数：13丁  
出版地域：不明



【画像6】



【画像7】

書名：六諭衍義大意抄  
 目的別分類：教訓科  
 表紙：薄灰色、題箋なし  
 形状：横15.6cm 縦22.8cm  
 出版地域：名古屋（尾州名古屋）



【画像8】

によれば「鈔」の漢字による『六諭衍義大意鈔』と記載があり、異名として「六諭衍義大意抄」、また「名古屋 永樂屋東四郎板」とある。

本資料は1丁目に「抄」が使用されており、「安政二」年刊行の「永樂屋東四郎善教」による後刷りであることが知られる。享保七（1722）年刊の『六諭衍義大意』本文のうち、『詩經』からの漢詩文を除き、漢字・仮名交じり本文だけをつづった改編版である。『六諭衍義大意』は、將軍吉宗の命によって庶民教化用に編まれた官刻の往来物であった。もとは荻生徂徠が『六諭衍義』に訓点を施しただけのものであったが、さらに平易な仮名書きの教訓書として編まれたものが『六諭衍義大意』である。

以上の4本が高堂家文書のなかに見出された往来物資料である。このほか小山家文書のなかにも2本の往来物資料が確認できた。

### 3. 富山県立公文書館の小山家文書について

小山家文書<sup>7)</sup>は、藩制期に砺波郡土屋村（現、福岡町土屋）の村肝煎を務めた小山善右衛門が所有していた資料群である。また分家で藩制末期に土屋村組合頭を務めた小山兵四郎家の資料も4点含むといい、資料の寄贈過程や小山家の由緒についても詳細にわかっている。

小山家の先祖は下野国に居住し、源頼朝に仕えた小山朝政で、永享12（1440）の結城合戦の折に越中へ来て、砺波郡土屋村領の内、小矢部川東に位置する八日市嶋に三代にわかり居住した。嘉永8（1631）年に十一代半兵衛が十村に任命されている。小山家は、藩制初期は十村、藩制中後期には土屋村肝煎を代々務めてきたことが知られるという。

当文書は、とりわけ藩政後期にあたる寛政期以降（1789～）の資料が豊富で、この時期の農村の暮らしを具体的に示すものが多く貴重であり、仕法書・留張類も整然と残されている。加賀藩農村の実態を示す典型的な肝煎文書というが、そうした資料群のなかから、『腰越状』【画像9】【画像10】1本と破損激しい1本の女子用往来【画像11】【画像12】の存在を確認した。

『腰越状』<sup>14)</sup>は、目的別分類では歴史科である。表紙は薄い緑青色で題箋はない。大きさは横18.4 cm、縦26.6 cmで総丁数は6丁である。出版地域など不明。源義経が、怒りをかかった兄頼朝への心情をつづった手紙であり、江戸時代から明治にかけて手習いのために

活用された「古状揃」のひとつである。「今川状」と合冊されたものが多い。

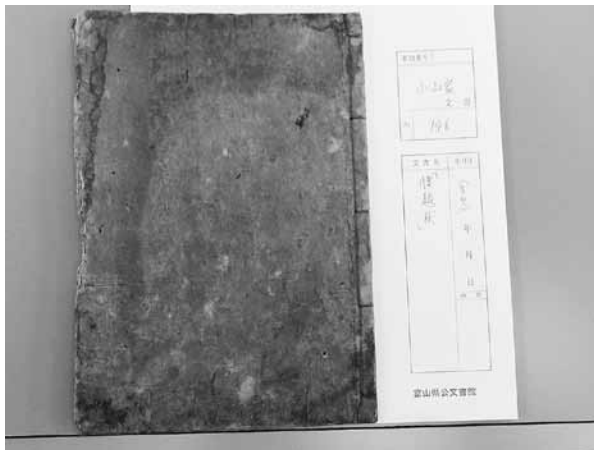
最後に紹介するものは、目的別分類では女子用往来に該当する。損傷が激しく、表紙や題名も定かではないが、「百人一首」「女今川」「女消息往来」が合冊されたものと推測できる。大きさは、横17.0 cm、縦23.5 cmで、総丁数は残存部分90丁である。出版地域も不明であるが、女子用往来が実際に小山家で読まれ、活用されていた痕跡として貴重であるといえるだろう。

#### 4. まとめにかえて

富山県立公文書館に所蔵されている往来物についての調査報告として、紹介してきた。資料は、それぞれ

「高堂家」「小山家」で所蔵されていたことが判明している。6本という資料数は、必ずしも多いとはいえないが、実際に使用された家庭や背景が明らかであるという点において貴重である。

目的別分類でみると、消息科往来が『庭訓往来抄』の1本、教訓科往来が『新板実語教童子教』と『六論衍義大意抄』の2本、産業科往来が『商売往来』の1本、歴史科往来が『腰越状』の1本、女子用往来が、仮の書名『百人一首・女今川・女消息往来』の1本という結果であった。出版地域別にみると、不明なものが3本あったが、京都「要法寺前町」「浪速」「尾州名古屋」といった多彩な出版地域名が記載された資料がそれぞれ確認できた。特に『庭訓往来抄』は、諸本のなかでも重要な位置づけにある資料性をもつことが明



【画像9】

書名：腰越状  
目的別分類：歴史科  
表紙：薄緑青、題箋なし  
形状：横18.4cm 縦26.6cm  
総丁数：6丁  
出版地域：不明



【画像11】

書名：百人一首 女今川 女消息往来  
目的別分類：女子用  
表紙：破損  
形状：横17.0cm 縦23.5cm  
総丁数：残存部分90丁  
出版地域：不明



【画像10】



【画像12】

らかとなった。

本調査結果を基盤として、今後、東北地域の調査結果との比較を含めて、北陸地域へ範囲を拡大し、それぞれの地域における教育環境や文化的背景について研究をすすめたいと思う。

## 注

- 1) 拙稿「弘前市立図書館所蔵「往来物」について—関西文化との関係から—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第1輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年3月)、拙稿「弘前市立図書館蔵『都花月名所』考—近世期の京都観—」(『関西文化研究叢書別巻 往来物の研究 第3輯』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2007年3月)、拙稿「往来物の「女ことば」について」(『関西文化研究叢書 第10巻』所収、武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年11月)、拙稿「近世期における「御所ことば」の記載について—東京大学総合図書館蔵「往来物分類集成」からの報告—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第104号、2010年10月)、拙稿「国語資料としての『都花月名所』—江戸時代後期における漢字表記と振り仮名—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第106号、2011年10月)、拙稿「『南都名所記』についての一考察—山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第110号、2013年10月)等参照。
- 2) 拙稿「岩手県立図書館所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第100号、2008年10月)、拙稿「八戸市立図書館 旧遠山家所蔵の往来物について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第102号、2009年10月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵の往来物資料について」(『弘前大学教育学部研究紀要』第103号、2010年3月)、拙稿「酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料—目的と出版地からの分類分析—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第107号、2012年3月)、拙稿「山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料—目的別分類からの考察—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第108号、2012年10月)、拙稿「山形における江戸時代の書籍流通について—往来物資料の出版地域からの検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第109号、2013年3月)、拙稿「秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察—弘前・酒田・山形との比較検討—」(『弘前大学教育学部研究紀要』第111号、2014年3月)等参照。
- 3) 拙稿「往来物にみる教育観—近世庶民生活におけることばの修得—」(『文学・語学』第209号、2014年5月)参照。
- 4) 分類については、石川松太郎著『往来物の成立と展開』(雄松堂、1988年)、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)、石川

松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 図版編』(大空社、2001年)を参考とした。

- 5) 地方出版の研究には、大田正弘著『尾張出版文化史』(六甲出版、1995年)、須山高明「近世紀州の『書商』」(『和歌山地方史研究』第38号、2000年)、鈴木俊幸「地方の本屋さん—たとえば高美屋甚左衛門—」(『国文学』42巻11号、1997年9月)等がある。
- 6) 長友千代治著『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、2002年)、鈴木俊幸著『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)、市川寛明・石山秀和著『江戸の学び』(河出書房新社、2006年)等参照。鈴木俊幸氏のご研究によれば「寛政期(1789~1801)を境にして、知と情報のあるようが大きく変化していくように思われる。」(『江戸時代の読書熱』(平凡社、2007年)17頁参照)という。
- 7) 『富山県史 史料編Ⅲ 近世上』(富山県、1980年)、深井甚三・久保尚文・市川文彦・本郷真紹著『富山県の歴史』(山川出版、2011年)、『富山県公文書館 高堂家文書目録(1)~(55)』(富山県公文書館)、『富山県公文書館 小山家文書目録(1)~(12)』(富山県公文書館)等参照。
- 8) 川瀬一馬「庭訓往来の假名抄について—古往来の研究(その三)—」(『青山学院女子短期大学紀要14』1960年11月)参照。該当資料の画像は107頁参照。
- 9) 『国書総目録 第五巻』(岩波書店、1967年)の782頁参照。
- 10) 石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)の559頁参照。
- 11) 『古典籍総合目録 第一巻』(岩波書店、1990年)の426頁参照。
- 12) 『国書総目録 第四巻』(岩波書店、1966年)の481頁、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)の374頁参照。
- 13) 『国書総目録 第八巻』(岩波書店、1972年)の29頁参照。
- 14) 『国書総目録 第三巻』(岩波書店、1965年)の430頁、石川松太郎・小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』(大空社、2001年)の265頁参照。

## 【付記】

貴重な文献資料の閲覧や撮影、ならびに掲載許可をいただくなど、研究にご協力とご助力をいただいた、富山県立公文書館の関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

本研究は、平成27年度科学研究費助成事業 JSPS KAKENHI (基盤研究 (C) 課題番号15K02555) の助成を受けたものです。

(2015. 8. 3 受理)